SAGA UNIVERSITY

かちがらす

佐賀大学広報誌　第6号　2006

大学のブランド
産学連携の取り組み

佐賀大学科学技術共同開発センター

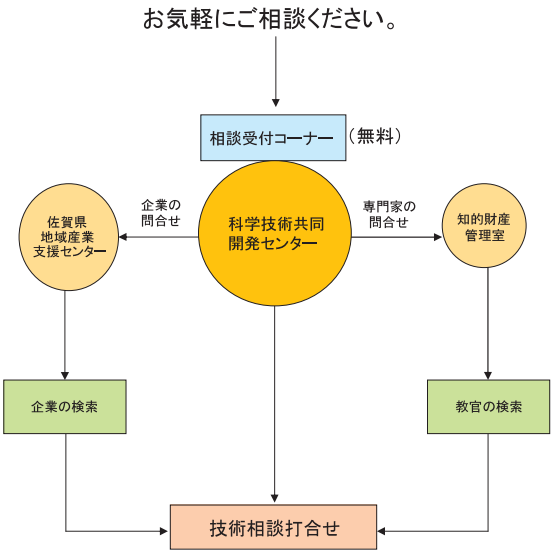
センターの目的

技術の高度化や生活・循環の変化に対応すべく、産・官・学が共同して科学技術の応用・開発に関わる研究を推進し、地域社会の技術開発の振興に貢献するとともに、大学における研究・教育の活性化をすすめることを目的とする。

センターの業務

- 民間等との共同研究および連携
- 民間等の技術者に対する高度技術教育・研修
- 民間等への学術情報の提供
- 民間等からの科学技術相談への対応（相談室）
- 学内および諸大学との共同研究
- 外国人研究者等との学術研究
- 学生に対する実際的な応用教育・研究

センターのしくみ



○内田センター長は、「科学技術交流シンポジウム」「インキュベート研究発表会」「産学官連携フォーラムｉｎ佐賀」「新産業創出セミナー」「学生ビジネスプランコンテスト」などの産学連携に精力的に取り組んでおられますね。そのエネルギーの原点を教えて下さい。

そうですね。好奇心が旺盛で、現状に満足せず、いつも改革する気持ちがあるからでしょうか。これらの取り組み以外にも、お声がかかったＮＰＯ自然会（農業法人）やＮＰＯこだわりの生産者の会などの会合へも積極的に参加し、講演やアドバイスを続けております。

また、学内においては、一昨年、センター長に就任しましたことを機会に、産学連携のあり方について研究し、他大学とは異なる独立採算を目指した「地域連携センター」構想を作成し、役員に提案しております。現在、産学連携推進機構設置検討委員会が設置され、審議が始まりましたので、近いうちに新しい組織として生まれ変わるものと期待しております。

○佐賀大学の産学連携に関して最も力を注いでいることは何ですか？

一言でいえば、大学の営業部長として、地域の企業に親しまれる「大学を売り込む」ことと思っております。法人化前の国立大学では、大学を売り込むという発想は全くなく、学外からの要請にも、お呼びがあったから協力するとの気持ちで対応していたと思います。法人化になったからと言って、大学が下手にでることはないという教員

科学技術共同開発センター
センター長
うち だ　すすむ
内田　進

九州大学農学部助手、佐賀大学農学部助教授、教授を経て、現在、科学技術共同開発センター長。主な役職は、農業施設学会理事、農業機械学会理事（表彰委員長）、農業機械学会九州支部支部長、（財）佐賀県地域産業支援センター評議員、佐賀県工業技術センター評議員ほか多数の審査員を兼任。専門は「農業施設」。穀物乾燥貯蔵施設の改善と「売れる麦づくり」の一環として佐賀県産麦の品質向上を目指している（JA との共同研究）。

産学連携の取り組み
「大学を売りこむ」

上海交通大学訪問
（右から１人目が上海交通大学副学長、左から１人目が内田進センター長、左から３人目が佐藤三郎副センター長）

佐賀大学の産学連携の取り組みについて、科学技術共同開発センター長 内田　進教授にインタビューを行いました。

学生ビジネスプランコンテスト

平成18年1月20日に佐賀市アバンセ大ホールにおいて、第1回佐賀学生ビジネスプランコンテストを開催しました。佐賀大学を含め佐賀県下3つの職業高校から合わせて57件の応募があり、1次審査（書類審査で21件に）、2次審査（プレゼン審査で10件に）を経て10件のビジネスプランが200名近い聴衆を集めてコンテストとして発表されました。鹿島市の街おこしをテーマにしたグループがグランプリと副賞30万円を獲得しました。

グランプリを受賞した佐賀大学生５人のグループ

「佐賀大学に入学してよかった」と思う教育指導を

科学技術交流シンポジウム

毎年7月に当センターと佐賀県地域産業支援センターが共催で行なってきた講演会で、昨年は医学部の臨床講堂で医学部の先生5名に講演をしていただきました。参加者は佐賀県下のベンチャー企業の方80名と佐賀大学医学部の学生・教職員合わせて150名ほどの参加でした。

インキュベート研究発表会

当センターには、学生ベンチャーを育成するためのプログラムとしてインキュベート研究があり、毎年15名程度の学生が参加しています。昨年10月末から11月半ばにかけて毎週木曜日の18時～20時にインキュベート研究生の発表会を佐賀駅南のアイスクエアビル5Fの会議室で開催しました。

産学官連携フォーラム in 佐賀

佐賀県下の企業と大学および官庁との交流を深めるために開催する講演会・事例発表会です。年に一度当番校として旧佐賀大学、旧佐賀医科大学、西九州大学と持ち回りで開催してきました。一昨年は11月26日にアイスクエアビル5F大・中会議室で佐賀大学が当番校として開催し100名を超える方が参加されました。今年度は3月4日に行なうことになっています。

新産業創出セミナー

佐賀市商工振興課が主催し佐賀大学が後援して行なう講演会です。昨年度までは毎月第2金曜日18時～20時に行なってきましたが、今年度は毎週木曜日の夜にテーマに沿って3～5週連続の集中した講演会なども企画しています。

企業へのサービス精神
――企業との信頼関係を構築

が多いことと思いますが、今後は、地域から期待される大学（教育、研究、産学連携）でなければ存続も危うい状況に陥ります。

特に、産学連携による外部資金の件数および金額は大学のバロメータとして評価されますので最重要課題となります。大学も、科学技術共同開発センター、TLO（技術移転機構）および知的財産管理室の統合を睨んだ産学連携推進機構設置検討委員会を設置し、大学を挙げて産学連携に取り組む姿勢を表明していると思っております。

○国立大学では法人化されてから、教員の方々の研究費が少なくなり、教員自らが外部資金を獲得する努力が必要だと言われています。これに関して、どのようなことに気をつけるべきだと思われますか？

外部資金を企業から獲得したいと思っても、企業のニーズに合わなければ成立しません。逆に、ニーズがあっても、企業が期待する結果を出さなければ、資金を出してくれません。つまり、佐賀大学の教員に頼んだら、目的にかなった回答を得られるという「信頼関係」がもっとも大切であると思います。

信頼関係を構築するには、企業へのサービス精神が重要であり、ボランティアで情報（知識）を提供し、分析することによって信頼関係ができる場合もあります。特に近道は、大学の組織（たとえば、科学技術共同開発センター）が行うイベントに参加し、企業に対してシーズを発表することではないかと思います。

○話は変わりますが、学生を教育するにあたって大切なことはなんだと思われますか？

卒業生が「佐賀大学に入学してよかった」と思う教育指導を行うことだと思います。農学部の学生に対して入学した理由を尋ねると、一番目に「授業料が安い」、二番目に「近隣の大学である（自宅通学ができる）」ことをあげており、農学部で学ぶというよりは卒業証書がほしいだけというように思えてなりません。

このような学生にやる気を起こさせるために、1年生には、環境問題やITを活用した農業技術、新聞記事の解説などを交えて講義をし、2、3年生には、研究室で行っている麦の分析実験を募集（4～5名）し、希望してきた学生に対して、来客に説明するパネル作りから分析実験の説明について指導し、分析・製作技術とコミュニケーションの大切さを話しております。

○最後に、佐賀大学は、これからどうあるべきだと思いますか？

少子化による受験生の減少と国からの運営交付金の削減によって、国立大学法人の経営は二重に苦しくなり、多くの大学が外部資金を導入し、交付金の削減を補填することを考えて産学連携部門を強化する方向に動いております。

佐賀大学では、教育先導大学として教育に重点をおきながら、地域の活性化の起爆剤となる卒業生を地域に送り込み、地域から期待される大学となる一方、儲かる産学連携部門を目指して活動すべきではないかと思います。

科学技術共同開発センター

救命救急センター本格稼動

国立大学として全国で７番目、九州では初めて佐賀大学に救命救急センターが誕生しました。

日本救急医学会指導医２人を含む救急専従医８人と看護部・各診療科のご協力を得て、プライマリ・ケアとクリティカル・ケアを基本とした住民ニーズに密着した救急医療を提供します。

救命救急センター長
瀧（たき）　健治（けんじ）

平成 17 年９月１日スタート

救命救急センターの取り組み

「地域医療の中核病院として地域に貢献する」という大学病院の使命から、昭和 56 年に佐賀医大附属病院に 24 時間の救急診療体制が整備され、昭和 60 年に新設医科大学として初めて救急部の設置が認可されました。ところが、専用病床がないことから、治療・看護体制の充実が課題となっていました。

国立大学の法人化に伴って国立大学に救命センターを開設する波が生れ、平成 14 年に佐賀医科大学（当時）の杉森甫学長が佐賀県に救命救急センター設置を要請し、佐賀県医師会の後押しで国立大学として全国で７番目、九州では初めて佐賀大学に救命救急センターが誕生しました。

東病棟３階に専用入院病床（集中治療室 10 床と一般病室 20 床）が整備され、ER 型救急と従来の救命センターとを一体化した他に類を見ない救命救急センターが誕生しました。病棟は、車椅子や点滴スタンド使用患者に快適になるよう改修されています。

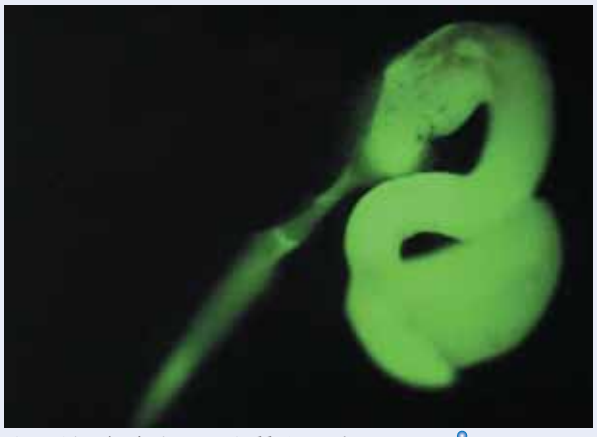
地域における救急医療体制の支援

急病や怪我に即座に対応できる 24 時間体制の救急医療システムは、地域でより良い医療連携を維持するのに重要です。当センターの開設は、救急医療だけでなく、県内の在宅医療や訪問看護を支援すること等を通じた地域医療との連携をも目指しています。佐賀県・県救急医療協議会・県医師会などと協力して地域医療機関と大学附属病院との連携を強固なものにするよう、当センターの責務を果たしていこうと思います。

今後の抱負

“佐賀大学に救命救急センターができて良かった”と言っていただけるようにしたいと思います。

救急医療は医療の原点であり、一昨年４月から全ての医師に２年間の卒後臨床研修が義務付けられました。このように救急医療は必ず体験すべき大変重要な分野と位置づけられています。大学の救命救急センターには医療従事者養成を担う使命があり、次世代の若い医師の育成、先端医療科学・看護科学の研究開発などの充実が期待されています。当センターでは、県庁・消防本部・県医師会などとの連携によって、命の危険に曝された救急患者を助ける喜びを教え、従来にもまして安全で質の高い医療と医学教育を支援できる、救急医療を教育できる場を提供していきたいと願っています。



クラゲの緑色タンパク質 GFP を
大豆中で発現させたもの。

佐賀大学の教育研究活動の動脈として

総合分析実験センター

総合分析実験センター長
高崎洋三（たかさきようぞう）

総合分析実験センターは、生物資源開発部門・機器分析部門・放射性同位元素利用部門から成り、それぞれが本庄地区と鍋島地区とに分かれて活動しており、計６ヶ所の活動単位がある。

生物資源開発部門は、鍋島地区では実験動物の飼育を主たる業務としている。マウス・ウサギ・イヌなどの動物を使って、薬物の作用や遺伝子の発現作用を分析する手段として、そして生物本来の構造や機能の研究などを行っている。このような人類の幸福に繋がる動物実験の重要性はますます認識されているが、生命倫理を考えると軽率な深まりが許されない事も十分認識している。本庄地区では主に遺伝子組み換え植物の研究がなされているが、これもバイオハザードには常に気を配って行っている。この部門は、研究支援活動を行うと同時に常に学内の生物科学分野の研究発展のパイロットとしても活躍している。

機器分析部門は、実験機器を使った測定と補修・点検を担当しているが、学生や若手研究者の機器操作の指導も行っている。また専任の教員や技術員の研究も活発に行われている。問題は、機器の補修やバージョンアップの費用が捻出しにくいことであり、大学間の競争に勝ち抜く体制が形成できていないことである。

放射性同位元素利用部門は、放射性同位元素を主にトレーサーとして使用する研究者のために活動してきた。法律に基づいて、利用者の研修・設備の維持・廃棄物の処理などの重要な裏方の仕事を行なってきたが、利用者の減少が続いていることが問題点である。

ごく近い将来、第４の部門として「環境安全管理部門」の設置を計画している。これは、佐賀市の重要な拠点としての佐賀大学が、自らの廃棄物のチェックをしたり、その定量法の改善を行なったり、環境問題の専門家となる学生を養成したりする部門である。大学が市民の信頼を得て、環境改善に取り組むための大事な部門であると思っている。

総合分析実験センター（鍋島地区）

電子顕微鏡
Electron microscope

大人気！中高齢者のための健康教室

文化教育学部助教授
井上伸一（いのうえ しんいち）

「転倒予防のための教室を開くからその体力評価をしてくれないか」という行政からの依頼で、歩行動作の解析や重心動揺などの評価を２年間のプロジェクトで行い、昨年度からは、健康スポーツ科学講座による健康教室として開催しています。

週１回２時間で３ヶ月間の計８回開講。第１期目は参加者30人程度のこぢんまりしたものでしたが、トレーニング効果の評価に動作解析など普通では行わない、世間的にいう「科学的」測定までやったことが目新しかったらしく、新聞やTVに取り上げてもらい回を重ねる毎に参加者が増加して、先日終了した３期目の教室には120名程度の参加があり、大がかりなイベントとなってきました。

骨密度、同年代の平均を１割もアップ

今回の講座では、年齢別に分けた12のグループに、文化教育学部健康福祉スポーツ選修の学生たちがボランティアとして活躍。将来は福祉関係に進もうと希望している学生たちなので、とても意欲的に取り組んでいます。

参加者にとっても、学生のような若い年代とのふれあいはわれわれが思っている以上に新鮮で楽しいものらしく、教室の間中笑いや歓声が絶えません。リピーターが多く、常連の参加者が多いのも、学生たちの功績が大きいのだろうと思います。

参加前後におこなう種々の測定も、教室の効果を如実に示すいい結果が得られています。最終講座終了後の測定では、参加者の関心の高かった骨密度が、同年代の平均を約１割上回る結果となりました。これは、ダンスやストレッチなどの全身運動を行ったことで、骨格系に適度な刺激が加わったためであろうと考えられます。また、加齢にともない増加する転倒の能力を評価するために重心動揺を測定したところ、これも20%程度バランス能力が向上したという結果を示しました。これらの測定でこの教室の有効性も明らかになっています。

次回４期目の教室は、４月頃スタート予定です。40代から80代まで幅広い年齢層の方が参加しています。興味ある方はぜひ参加していただければと思います。
（連絡先：文化教育学部健康スポーツ科学講座　井上伸一　tel：0952-28-8304）

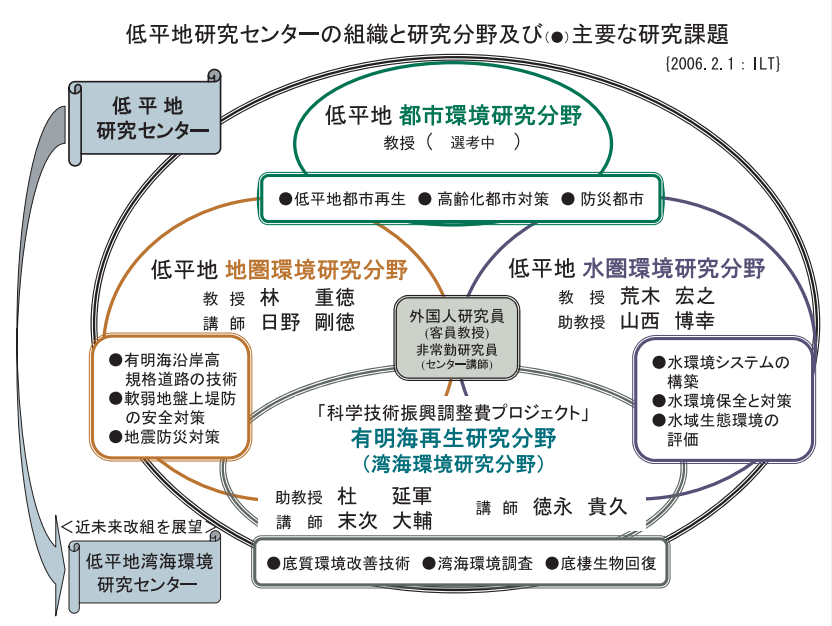
地域の課題に真っ向勝負！

～低平地・湾海環境の研究を世界へ発信～

低平地研究センター
センター長
林（はやし） 重徳（しげのり）

＜組織、研究の分野と課題＞

低平地研究センターは、現在右図に示すように、低平地地圏環境、低平地水圏環境、低平地都市環境の３研究分野に、平成17年度より科学技術振興調整費のプロジェクト「有明海再生研究」が加わり、４つの研究分野で構成され、それぞれ主要な課題に取り組んでいます。



＜地域貢献、国際交流 ～世界へ発信＞

当センターは、地域の課題を正面から受け止め、特に地域の緊急かつ重大な“有明海問題”を解決するため、平成13年度には地元の異分野の５機関でコンソーシアム（研究共同体）を組織し、５ヶ年間で総額約３億２千万円の競争的資金を獲得して研究を行い、極めて重要な成果を上げてきました。この成果を基にさらに厳しい審査を経て、平成17年度科学技術振興調整費(H17年度受託費:約１億８千万円)を獲得し、５ヶ年の予定で研究を継続しています。“有明海異変”の本質を明らかにするとともに、有明海再生への道筋を指し示す成果を上げるべく頑張っています。

当センターは、低平地研究会、低平地市民フォーラム、技術講演会・講習会などの開催や機関誌「低平地研究」(写真(a)：1992年創刊、毎年発行)をはじめとする各種の刊行物等を通して、その途中経過や成果を地域住民の方々へ報告するなど、積極的に地域への貢献を行っています。

また、低平地・佐賀平野と湾海・有明海をフィールドとして得られた研究成果を、様々な形で世界に発信しています。具体的には、国際低平地研究協会（International Association of Lowland Technology：IALT、1998年創設）の運営、国際学術論文集（写真(b)：Lowland Technology International：LTI、1999年創刊）の年２回発行、国際シンポジウム（写真(c)：International Symposium on Lowland Technology：ISLT、1998年開始）の隔年開催等を継続して行っています。過去４回開催したISLTには、毎回13～16ヶ国から90～110編の研究論文が寄せられ、参加者は海外からの40～50名を含め合計120～150名を数えます。今年も、ISLT2006を佐賀で開催します。

(a)

(b)

(c)

『コンコンジャンプ』のドラマーとして活躍

NHK「みんなのうた」にも選ばれた

文化教育学部国際文化課程
平成13年度卒業
天羽寛子（あもう ひろこ）

『コンコンジャンプ』メンバー（左から、ヒロコ・サトミ・ハルカ）

私は佐賀大学を卒業して5年になり、現在は東京で『コンコンジャンプ』というバンドのドラマーとして活動しています。『コンコンジャンプ』は私が在学中、同じサークルだった現在のボーカルのサトミに、「ガールズバンドをしよう」と誘われ結成しました。その頃、私にとってバンドはただの趣味で、卒業したら地元の徳島に帰って就職するつもりだったので、それまでならと返事をしたのでした。

それ以前にも沢山のバンドをしていましたが、『コンコンジャンプ』のドラムをして初めて「バンドってこんなに楽しいものなのか、こんなに楽しいことが職業だったら幸せだろうな。」と思いました。その思いは膨らみ、卒業する頃には「『コンコンジャンプ』を本気でやりたい」と考えるようになっていました。私を誘ったサトミも私と同じ位本気だったので、二人で東京に行こうと決心しました。「東京に行けばすぐにデビュー出来て売れる」と、根拠もなく自信満々でした。

『コンコンジャンプ』最新アルバム
「ラッキー」LKCR10030／¥1,800

しかし、私達は楽器初心者だったし、実績も全くなかったので、当然周りには反対されながらの上京でした。今思えばバンドなのに、二人だけで、しかも勢いだけでよく出て来たなと思います。でも、時間はかかり、思い通りにならなくて泣きそうな時期もあったけれど、2003年9月には念願のメジャーデビューができました。その時その時に何事も信じて行動するということは大切だと改めて感じています。

そして発売した楽曲がNHKの『みんなのうた』にも選ばれました。現在では自分達のための『ロケットガールズ』というレーベルを自ら立ち上げ、私たちの楽曲がテレビ番組のエンディングに使用されたりしています。

活動している中で一番嬉しいのは、全国に私達を待っていてくれる人々がいるという今があることです。上京した当初は自分達が楽しむためにバンドで売れようと思っていましたが、今は、「『コンコンジャンプ』の曲に元気づけられますという沢山の人々のためにも、一人でも多くの人に知ってもらい、元気づけてあげられるバンドになるために売れたい」という思いで活動をするようになりました。

今はそれが一番楽しく、素敵な仕事だと思っています。10年後も20年後も、「あの時『コンコンジャンプ』を職業にしたいと思って良かった」と思えるように、これからも自分を信じて、応援してくれている人々のパワーをもらいながら、精一杯頑張っていきたいと思っています。

＊＊『コンコンジャンプ』オフィシャルサイト：
http://www.conconjump.com ＊＊

第4回 佐賀大学杯高等学校ディベート選手権大会

高等教育開発センター教授
佐長健司

1月29日(日)に、本学を会場として、題目に記したディベート大会を開催した。日本語部門と英語部門に分かれ、佐賀、福岡、長崎、熊本の4県から100名以上の高校生の参加を得ることができた。本学の学生も100名以上が参観し、高校生の熱い討論に驚きの声を禁じることはできなかった。

この大会は、地域貢献事業としてディベートを通して、九州地区の高等学校と佐賀大学との交流を図り、相互理解を深める契機を得ることを目的としている。また、日本語部門では社会的問題についての関心を深め、議論の能力を育成すること、英語部門では英語に対する関心を深め、英語コミュニケーションの能力の育成を図ることもある。

今大会の論題は、日本語部門は「日本は外国人労働者を積極的に受け入れるべきである、是か非か」である。英語部門は、“It is good for high school students to use a mobile phone.”とした。このように論題は、今日の国際化、情報化の進展に応じて、社会的な問題を取り上げている。いずれの部門においても、リサーチが充実していて、信頼性の高いエビデンスを根拠とする説得力のある議論が展開された。とても高校生とは思えないほどであった。

日本語と英語の論戦　白熱！

成績は、日本語部門優勝校が長崎県立長崎西高等学校であった。英語部門優勝校は熊本県立第一高等学校で、地元の佐賀清和高等学校は準優勝と健闘した。

参加校の紹介

日本語部門は、福岡県立修猷館高等学校、福岡双葉高等学校、久留米大学附設高等学校、佐賀県立武雄高等学校、学校法人大牟田学園大牟田高等学校、長崎県立長崎南高等学校、長崎県立長崎西高等学校、熊本県立熊本高等学校の8校である。

英語部門は5校の参加で、佐賀清和高等学校、長崎県立長崎西高等学校、熊本県立第一高等学校、熊本県立熊本北高等学校、熊本県立東稜高等学校であった。

佐賀大学では、学術研究や文化活動、スポーツなどで活躍した学生及び学生団体を表彰しています。
平成17年11月30日の学生表彰授与式では、下記の学生たちが、長谷川照学長から表彰されました。

医学部　ボート部
代表者 **岡部　智史**（オカベ サトシ）他39名

第44回九州・山口医科学生体育大会
男子対校戦　優　勝

僕たち佐賀大学医学部魁偉は九州山口医科学生体育大会ボート部門対校戦で優勝を果たすことができました。2月の寒空の中での乗艇、合宿での1日4部にも及ぶ練習が実っての優勝でした。これも部員やOB・OGの方々をはじめとする周囲の人たちの応援があってこその結果だと考えています。本当にありがとうございました。これからも佐賀大学医学部ボート部一同、佐賀大学の顔となれるよう練習に励んでいきたいと思います。

医学部　女子バレーボール部
代表者 **山田　春奈**（ヤマダ ハルナ）他24名

第44回九州・山口医科学生体育大会
優　勝

今回は学長賞を表彰していただきありがとうございます。私たち佐賀大学医学部女子バレーボール部は、現在プレーヤー13人、マネージャー4人で、毎週火曜、木曜、土曜の週3回医学部の体育館で練習しています。勉強との両立が大変で、全員が揃って練習をすることがなかなかできないのですが、今回の九州・山口医科学生体育大会での優勝を励みにこれからもチーム一丸となって頑張っていきたいと思います。

医学部　水泳部
木　下　麻悠子（キノシタ マユコ）

第44回九州・山口医科学生体育大会
女子100m自由形　優　勝

水泳とは一見個人競技のように見えますが、6年間部活を通して感じたのは個人の努力はもちろんのこと、部員皆が一丸となり切磋琢磨していくことが継続には必要不可欠であったということです。そして根気強く自分を高めるよう努力することの大切さも学びました。
その集大成として、卒業間近の最後の年にこのような素晴らしい賞を頂きましたことを、顧問の松尾先生を初め諸先輩方、部員の皆、その他関係者の方々に深く感謝したいと思います。

医学部　水泳部
野　瀬　智　未（ノセ トモミ）

第44回九州・山口医科学生体育大会
女子50m自由形　優　勝

この度は学長賞という名誉ある賞を頂き、光栄に思います。このような賞が受賞できたのも、部活の先輩や友達、家族、その他たくさんの人の支えがあったからこそ出せた結果だと思っています。ありがとうございます。
これからもこの賞を励みに、佐賀大学の学生として誇りを持って、勉強・スポーツともに精一杯頑張っていきたいと思います。

鹿児島大学大学院　連合農学研究科
井　上　奈　穂（イノウエ ナオ）

平成16年度アメリカ油化学会
健康と栄養部門　第1位

2004年5月に米国コタ州シンシナティで開催されたアメリカ油化学会年次総会の「健康と栄養」部門でのExcellent Poster Awardの受賞に対して、今回、学長賞をいただくことができました。これまで、自分自身が努力してきた結果に対して、学長賞という栄誉ある賞の受賞という形で評価していただけたことを大変光栄に思っています。これからも、この受賞を励みに、さらなる努力を続けていきたいです。

鹿児島大学大学院　連合農学研究科
Mohamed Abo El-Hamad Rashwan（モハメド アボエル ハマド ラシュワン）

平成16年度地盤工学会
九州支部
学生賞（優良学生賞）

学長賞をいただき大変うれしいです。私は2002年9月に佐賀に来ました。佐賀では甲本教授の指導のもと3年間鹿児島連大生として研究に励み無事に博士号を取得することが出来ました。自分の夢が叶えられて大変幸せです。私は佐賀にいる間、専門知識を増やすだけでなく、課題探求能力を鍛え、いろいろな経験を積むことが出来ました。佐賀大学や佐賀の皆様には本当にお世話になりました。皆様是非アレキサンドリアへお越し下さい。今度は、私が皆様へ恩返しをする番です。

工学系研究科　エネルギー物質科学専攻
小山田　重　蔵（オヤマダ ジュウゾウ）

日本化学会第83春季年会

学生講演賞

学長賞をいただけると聞いたときは、受賞理由がわからず大変驚きました。受賞理由は日本化学会第85春季年会での学生講演賞の受賞でしたが、自分がこれまでに行ってきた研究の成果が評価されたことはとても嬉しく、大きな励みになりました。今後も学長賞の受賞に恥じないように、さらに研究に打ち込んでいきたいと思います。

工学系研究科　エネルギー物質科学専攻
GUAN WEIMIN（関　偉民）（グワン ウェイミン）

第1回国際学生会議
―生命サポート科学技術におけるフロンティア―
優秀発表賞

この度は、学長賞をいただき、ご指導いただきました山部教授や、研究活動に精力的なアドバイスとご協力を賜りました研究室の先生方やメンバーの皆様に心より感謝申し上げます。今回の受賞を励みとして、大学院博士前期課程在学中に成し遂げられなかった数々の課題を遂行していく一方、本研究のさらなる発展に少しでもお役に立ちたいと考えております。

学長賞受賞者の表彰

文化教育学部
陣内（ジンノウチ） 綾子（アヤコ）

第89回日本陸上競技
選手権大会
女子800m　第2位

学長賞が頂けるような結果を残すことができてよかったと思います。十分な結果が出せたのはコーチや周りの人のおかげです。大学生となり自分の時間は増えましたが、まだまだ有効に使えていないと思います。一瞬一瞬を大切に日々精進していきたいです。
来シーズンではさらに活躍して「佐賀大学」の名前を轟かせられるようにがんばります。応援よろしくお願いします。

文化教育学部
中西（ナカニシ） 望（ノゾミ）

第57回毎日書道展U23

大字書部　奨励賞

この度は、学長賞というすばらしい賞をいただいたことをとても嬉しく思います。この賞をいただくことができたのも、ご指導して下さった先生のおかげだと感謝しています。
大学に入り、まさか自分がこのような賞をいただけるとは思ってもみなかったので、この賞をいただいたことを励みにしながら、これからの書道や勉強に活かしていけたらいいなと思います。本当にありがとうございます。

文化教育学部
岡（オカ） 美沙希（ミサキ）

第57回毎日書道展U23

大字書部　新鋭賞

佐賀大学に入学してから、竹之内先生のご指導のもと、書道に本格的に取り組むこととなりました。週2回のゼミで特に一字書に力を入れて取り組んできたので、今回の受賞の知らせを聞いたときは、4年間の活動が認められたような気持ちになり、自信にもなりました。また、何よりも未熟な私に熱心にご指導くださった竹之内先生や、本音でアドバイスをくれた仲間、家族に感謝しています。ありがとうございました。

JOY
代表者 中村（ナカムラ） 理美（リミ） 他171名

佐賀県社会福祉協議会の「平成17年度学生ボランティア活動支援事業」に採択

今回、学長賞を戴きJOYのメンバー一同大変嬉しく思っています。
ボランティアと聞くと無償の慈善活動というイメージが強いと思いますが、私たちは教育ボランティア活動に参加し子どもと接する事で様々な現場での経験や子どもに対する理解を深めるなどの、将来教員になるための確かな経験を積むことができます。私はボランティアとはしてあげるものではなく何かを学びとるものだと思っています。これからも頑張っていきたいです。

文化教育学部
岸本（キシモト） 真哉（シンヤ）

第35回日彫展

入　　選

今回学長賞を受賞したことについて、まず教授・先輩・後輩と制作に協力して頂いた皆さんに感謝を述べたいと思います。彫刻は立体であることから自分一人の力だけでの制作は大変困難です。教授を始め先輩や、特に後輩には制作過程での重要な作業を手伝ってもらいました。本当にありがとうございました。日彫展に入選し、さらに学長賞まで受賞したことを大変嬉しく思います。これを励みにさらに進んで行きたいです。

文化教育学部
縁谷（エンヤ） 由美子（ユミコ）

第35回日彫展

入　　選

今回、学長賞という素晴らしい賞を受賞できましたことを大変嬉しく思います。大学二年生から専門的に活動し始めた彫塑という分野での表彰でした。日彫展という全国公募の展覧会での入選で、初めて大きく評価され、今後の制作活動における自信につながるものになりました。今回の作品は、約三ヶ月の制作期間で、自分としっかり向き合っていくという姿勢で作りました。この賞を励みに、残りの学生生活も充実したものにしたいです。

医学部　弓道部
木村（キムラ） 光一（コウイチ）

第44回九州・山口医科学生
体育大会
個人戦男子　優　勝

この度は学生表彰を賜りまして、大変有難く思います。私たち医学部生は、他の学部生が活躍する舞台においてなかなか認識されにくい対象です。それをこのような形で学校に認めていただき、大変喜ばしく思っております。今回の受賞を機に、これからも部員一同よりいっそうの努力をし、好成績を残していきたいと思いますので、応援していただけると大変心強く思います。

医学部　水泳部
小池（コイケ） 舞（マイ）

第44回九州・山口医科学生
体育大会
女子100m平泳ぎ　優　勝

この度は名誉ある学長賞を頂き、大変うれしく思います。この賞をいただけたのは、私を応援し、支えてくれた人たちのおかげです。しかし、自分の記録はまだまだです。この賞を励みにして頑張っていきたいと思います。また、佐賀大学との合併ということで、キャプテンとして今まで以上に本学水泳部との交流も深め、部員とともに水泳部の更なる向上に努めていきたいと思います。

記事提供　佐賀大学学生コミュニティサイト
SAGA DIRECT
http://www.sagadirect.net/index.php

キャンパスライフ

文化教育学部
文化教育学部国際文化過程３年
川　原　まりこ

三年間をこの佐賀大学で過ごしてきて最近特に思うことは、大学には学生の興味を後押ししてくれるような環境が揃っているということです。私は授業を大切にすることは勿論、大学生ならではの自由な時間を有効に使いたいということで、ユニキッズの『英語で遊ぼう』のプログラム、そして授業で初めて出会ったドイツと言う国に興味をひかれ、『ドイツ研修旅行』にも参加しました。活動を通して先生方にはいろいろな場面で指導していただく機会が多かったのですが、何といっても一番驚いたのは「学生に様々なことを体験し、学んで欲しい」と先生方が熱意を持って考えていらっしゃることです。

何でもいいと思います、もし何かに興味を持ったら、行動を起こしてみる。そうすることで、一緒の目標に向かって励ましあう友人、熱心に指導して下さる先生方に出会うチャンスを得ることができます。大学は自分の文化を発展させられる最良の場所だと実感する日々です。

経済学部
経済システム課程総合政策コース３年
築　瀬　孝　行

2005年度前期学園祭中央実行委員会（以下、中実）の実行委員長を務めました。

元々、内気なタイプだったのですが、大学に入ってからは自分を磨くことを重視したいと思いました。大学主催のリーダーシップセミナーにも参加し、そこでは他団体の幹部の方と一緒でした。そういった場において、自分の意見をどう表現していくのかという力が養われたと思います。大学は小・中・高のように、与えられたことをこなすのではなく、自分で考え、自分で変えていかなければなりません。学園祭の時期は、睡眠時間が短くなることもあり、大変でしたが、終わった後は充実感でいっぱいでした。私はもう４年生になるので、中実委員長のように人を動かす仕事をすることもありませんが、これからも自分をもっと変えていけるように頑張っていきたいです。

医学部
医学部医学科2年
森　永　久美子

時間はかかりましたが、ようやく医者への道を歩みだしました。佐賀に来て、講義に部活にバイトに遊びにと、様々な経験を重ねられている気がしますが、まだまだこれからだと楽しみに思っています。

部活は、小児科病棟の子ども達と遊ぶ「すずめの学校」、病院ボランティアの「SMILE」、それからジャズダンスに所属しています。以前はラグビー部のマネージャーを務めたり、手話サークルでも活動したことがありました。

時に、余裕がないと感じる時もありますが、病棟の子ども達の笑顔を見ると癒されて、『さあ、(この子たちのためにも)また頑張ろう』と思えます。また、今年度は何度か法医解剖に立会わせて頂く機会があり、身をもって、改めて生と死をみつめることもありました。私は浪人後、他大学の農学部に拾ってもらい、楽しくて中身の濃い1年間を過ごしましたが、医者になる想いを諦められずに再受験に至りました。今までもこれからも平坦な道ではないですが、色々な人との出会いや経験全てを糧として、初心を忘れずに、自分の目指すお医者さんになり、患者さんの笑顔を増やしていきたいですね。

理工学部
物理科学科3年
小　嶋　達　郎

物理学について勉強しています。

大学に来てからは友人に恵まれました。いろいろなタイプの人に出会えたので、そこから学ぶことが多かったです。佐賀大学の魅力は小さめのキャンパスから生まれるアットホームさだと思います。また、大学生になってからは自分自身の時間が増えたので、読書や思索の時間を取れるようになりました。

私にとって、大学は『人生の土台を築く場』です。ここで学んだことを活かして、将来は人に貢献できる仕事がしたいと思っています。

編集後記

本号では、佐大生の活動や普段の生活をふんだんに掲載しました。これは、「学生の生活が知りたい」という本誌への要望に応えたものです。大学全入時代を目前にして、各大学が魅力あるブランドを発信していますが、大学ブランドの根幹は、やはり教育と研究の質の高さです。学生にとって魅力ある教育体制と環境を提供できるか、社会のニーズに応えられる研究成果が出せるかが勝負です。本誌でも佐大ブランドをどんどん発信したいと思っています。

（広報室長　早瀬　博範）

農学部
生物生産学科環境情報系３年
松　澤　匡

2005年4月に雅楽部を設立し、今は部長を務めています。

大学では、ただ農業の勉強をするのでなく、医学・化学・物理・生物・量子力学といった様々な見地から農業を捉えて研究しています。中でも私は水に関して興味を持ちました。干潟の土を使って水を浄化するというシステムがあり、４年生になったらこのシステムについて研究したいと思っています。また、勉強だけでなく、これからも音楽を通じて地域活動に参加していきたいです。

大学は自由なので、考え方によってはやりたいことがやれる夢のような世界です。ただ、自分からアプローチしていかなければなりません。私は佐大で、人の縁に恵まれました。この縁を自分のものだけにするのではなく、周りにも還元していけたらと思っています。

【表紙画制作者】　文化教育学部 教科教育　助教授　栗山　裕至

病院まるごとクリスマス

医学部医学科三年
久保唯奈

私達"SMILE"は、2000年に「病院を少しでも明るい雰囲気に」「患者さんと何か楽しいことを」という目的で設立された学生の病院イベント企画グループです。これは、入院患者の方へのアンケート結果から「病院は暗い、つまらない」という声が一番多かったことがきっかけでした。これまで震災の募金活動や塗り絵大会・コンサートなどのイベントの実施、院内図書の設置、病院案内や院内学級の補助など、ささやかではありますが、病院内での活動を行ってきました。

昨年12月には、毎年恒例になっているクリスマスコンサートとそれに向けて気分を盛り上げていただこうと2週間前からクリスマスデコレーションをしようという企画、「病院まるごとクリスマス」を計画しました。

この企画のヒントになったのは、昨年私が訪れたスウェーデンの大学病院です。その病院は玄関を入ったところから、沢山の絵画や彫刻が展示され、とても病院とは思えない様子でした。柱は赤や黄色の鮮やかな配色で、白い巨塔と称される日本の大学病院とは全く異なるものだったのです。年間予算の1%は必ず芸術品にあてるという規則があり、その明るい病院の雰囲気に驚き、感動しました。少しでもこれを佐賀にも取り入れられないものか・・・。

クリスマスデコレーションの計画としては市民の皆様からクリスマスに関係する作品を提供していただき、それを展示することで、市民の方にも病院を身近に感じていただき、患者さんに楽しんでいただこうというものでした。残念ながら準備期間と宣伝期間が短かったために、病院を埋め尽くせる程の多くの作品は集まりませんでしたが、ひぜん張子の恵比寿サンタクロースやかわいらしいトールペイントなどを提供していただくことができました。各階の病棟の食堂と休憩室を中心に外来ロビーまでを飾りつけました。初めての試みで病院スタッフには御迷惑をおかけした部分も多々ありましたし、クリスマスという宗教行事を大々的に行うことに躊躇する部分もありました。しかし、25日が過ぎ片付けをしていると、何人もの患者さんたちから「もう終わり？次は正月かね？」などとお声をかけていただき、少しは喜んでいただけたかもしれないと感じられました。毎年好評のクリスマスコンサートも今年は医学部室内学部、鍋島中学校の合唱部、教育学研究科大学院生の弓削田さんのピアノ弾き語りなどの演奏で盛り上がり、涙を流しながら聴いて下さる方もいらっしゃったほど感動的なものでした。

私達は常に患者さんにも笑顔を、自分達も笑顔をという想いで活動していますが、実際のところ患者さんから笑顔をいただくことばかりです。これからも一人でも多くの笑顔に出会えるよう活動していきたいと思っています。

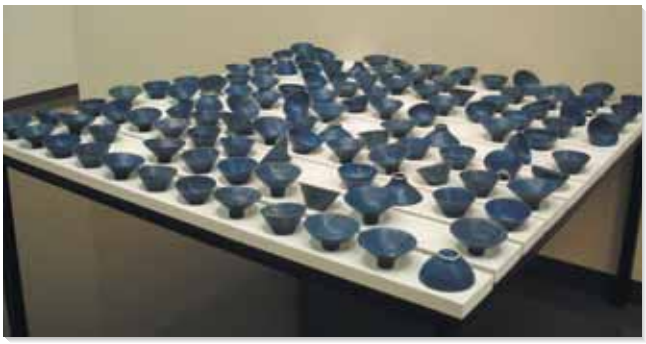
あいさつをする久保唯奈さん

佐賀大学広報誌 ふらぶらーす 第6号
■編集・発行／佐賀大学広報室 ■〒840-8502 佐賀市本庄町1番地 TEL:0952(28)8153 FAX:0952(28)8921
■発行日／2006年3月17日 ■ホームページ／http://www.saga-u.ac.jp ■E-mail／sagakoho@mail.admin.saga-u.ac.jp

誌上ギャラリー

作品名「lapis lazuli」

桑本（くわもと） 綾（あや）（文化教育学部美術・工芸課程4年・窯芸専攻）
（2006年2月開催の第50回卒業制作展出品作）



【作者プロフィール】

1983年熊本県生まれ。現在、文化教育学部美術・工芸課程4年次在籍。窯芸を専攻。4月より本学大学院教育学研究科へ進学予定。

【作者コメント】

「lapis lazuli」とは「瑠璃色」という意味です。器を壊すことでものの価値を一度失わせ、その上で、焼き物を修復する技法である「金継ぎ」によってこれまでにない価値観を創り出すことを試みました。

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています。 PRINTED WITH SOY INK